

## 日中学院校友会主催

### 「早春の杭州・魯迅と老酒の紹興」

長谷川 良一

第1回の北京と大連、第2回の北京と天津と2年間北京が続いたので、第3回目は何処かほかのところをという声で、昨年の旅行のおわった直後からあがっていた。候補地として西安か江南はどうかということで、理事会で話し合ったが、約1年前に西安旅行のツアーを組んだ人の話では、あまりにも金儲け主義が露骨に出ていて、あまりよい印象を受けなかったということだったので、昨年末の理事会で今回は結局、表題のような旅におちついた。最近、淀山湖のほとりの周荘が江南の水郷としてクローズ・アップされているが、すでに典型的な観光地である杭州には望むべくもないが、紹興の八字橋のあたりにはそれに似た風景がまだ残っているのではないかと期待したのである。色々の手違いから今回の旅行の計画が正式に発表されてから旅行社に代金を振込むまでの期間が1週間もなかったため、参加者が20名あまりと少なく、参加者35名として料金を割り出していた交気ワールドの松田社長にはきわめて申し訳ない結果となってしまった。もし来年も旅行を企画するとしたら、もっと募集期間を十分にとって旅行社に出血サービスをしてもらう事を選ばなければならないだろう。

昨年の旅行記でも書いたことだが最近の変化は目まぐるしい。杭州と紹興は82年の夏、上海は3年前の夏に訪問したのが最後だったので、私の知識はもう役立たない。訪問・見学先、名物料理など、プランはすべて松田社長におまかせし、出来てきたスケジュール表に紹興の八字橋と上海の魯迅の故居を追加してもらっただけであったが、結果として、4泊5日の旅としては内容が極めて充実していて第1回、第2回におとらず参加者に満足して頂けたのではないかと考えている。これはすべて松田社長の功績である。

今回の旅のプロローグは上海であった。3月8日の昼、上海空港に到着後、ただちにバスで浦東開発区を一巡、外灘を散策して、夕刻2階建の旅遊専用列車で杭州到着、レストランで夕食後四星

ホテル黄龍飯店に宿泊。第2日目は靈隱寺。大雄宝殿の釈迦牟尼像は66年の春に訪れたときには、その前年に再建されたばかりで金ぴかであったが30年の歳月を経て、すっかりそれらしい雰囲気も湛えていた。ただ昨年飛来蜂のそばにコンクリートで完成された大足、雲岡、大同などの石仏群のコピーはそれぞれの実物を目にしたことのある私には、その仕上がりがあまりにもお粗末な気がした。杭州―紹興間のハイウェイに出るまでの渋滞で手間取って、紹興についたのは昼になっていた。レストランに直行、紹興の名物料理の干菜悶肉、土豆絲などの昼食、五香豆腐干是北京の豆腐干とは違って昔懐かしい味であった。午後最初に見学した国営東浦老酒醸造所では老酒の醸造過程を見せてもらったが、醪（もろみ）の袋をアコーディオンのように横にならべて絞るのが珍しかった。売店では団員一同がお土産に5年物、8年物と盛んに買い求めている。つぎに訪れたのが王羲之の「蘭亭集序」で有名な蘭亭。82年に訪れたときには、如何にも古跡然としていたが、あたり一面に竹が植えられて、すっかり公園のようになっており、10数年前のたたずまいをのこすのは、一番奥の墨集亭あたりだけだった。旅行の説明会で紹興の農民のかぶる種帽のことを紹介していたので、売店でそれを発見した団員たちが我先にと20元でもとめたが、その後訪れた先々で7元、8元、10元、12元、15元と値段がまちまちで、喜んじがっかりしたりしていたが、それは帽の質にもよるわけで、一概に高い買物をしたとは言えない。つぎにお参りしたのが治水で名高い夏王朝の禹のお墓大禹陵、禹を祀る大禹廟。参道が修理中だったのでバスがはいれず二人乗りの三輪車に乗って往復したが、一人当たり10元ということだった。82年の時は杭州からの日帰りではここには来る時間がなかったので、私には印象が深かった。昔の石きり場のあとに水が溜まって観光地になった東湖は、前に訪れたときには、運河の傍にある周

りには何も無かった薄汚れた白壁のあるだけの場所であったが、道筋には土産物の店がならぶ真っ白な白壁の入り口になっていた。折から雨模様で始めはためらったが、折角来たのだからとゆうことで三人ずつ舟に乗った、水の透明度は以前より落ちているようだった。ただ乗った舟が他の所ではほとんど見かけることの無くなっている紹興特有の足漕舟だったので、一同大喜びだった。魯迅の生家を復元した故居を見学したのち、孔乙己の舞台になった咸亨酒店を訪れたが、小説の中の姿そのままに復元されていた十数年前の素朴なものとは違って、元のかたちを残しながらもすっかり豪華な造りになってしまっていた。黄昏時になって最後に訪れたのが八字橋であった。かつての古都水郷、紹興は現在急速にその姿を変えつつあるが、この辺りは昔の面影を色濃く残す数少ない貴重な場所で、言わば紹興観光の目玉である、この古都らしい佇まいがいつまで保たれることだろう。一同しきりにその事を惜しがっていた。その夜の宿の紹興飯店は、前の時、昼食を食べた事のある招待所の跡に建てられた、当地の民家の風格を備えた中庭や池のある美しいホテルであった。

第3日目は前日見学し残した魯迅記念館、三味書屋、秋瑾故居を訪れ11時には杭州に戻り、午前中に六和塔、虎跑泉を見学した。午後はまず西湖の遊覧船に乗って一周した後、岳廟、黄龍洞を訪れた。黄龍洞は十数年前には道観跡の泉と方竹だけの静かな場所だったが、沢山の建物が出来て俗っぽい娯楽施設に成り代わっていた。夕食は西湖のほとりの杭州随一の料亭、楼外楼で名物料理を賞味、叫化童鶏、東坡肉をはじめ数々の料理はさすがに老舗だけあって美味の一言に尽きた。

第4日目は11時に上海に戻り午前中は玉仏寺を見学。ビルマからもたらされたという大きな玉仏は中国渡来後、信者によって宝石がちりばめられ、ほかに類を見ないものとのガイドの説明だったが、実は昨年の旅行の時、時間がなくて案内できなかったが、北京の北海公園の団城には、もっと沢山の宝石がちりばめた素晴らしい玉仏が存在するのである。午後は豫園を見学したのち友誼商店で買物。豫園はちょうど元宵節の跡で灯籠飾りが園のあちこちに飾られたままだったので、本来の姿を

見学したい人にとってはやや不向きであった。買物時間は2時間と長すぎるかとも思えたが、南京路の新華書店へ足をのばす等、団員一同生き生きと買物時間を楽しんでた。上海の梅龍鎮はツアーの人びとにはあまり知られていないが、上海の人びとにはよく知られたグルメのメッカである。名物料理の上海蟹のおおきなのが出たのはいうまでもないが、桂魚の酒蒸しが新鮮で極めて美味であった。上海の雑技は中国の三大雑技の一つに数えられるが、ちょうど専用の劇場が建て替え中で、上海商城という大きなビルの中の劇場で公演が行われていた。フラ・フープを取り入れた最近の新しい出し物も有ったが、そのほとんどのものが伝統的な出し物で、何度も見たものだったが、その技はきわめて高度なものであり、団員一同は十分に満足した。

最後の日の12日の朝にはこの度の旅行のしめくりとして、魯迅の亡くなった場所である故居を訪れた。私は66年の春、75年の夏、今回と3度見学をしているが、中の様子はその度毎にすこしずつ変わっていて、今度などは階段もすっきり掛け替えられて内装も綺麗に塗り替えられていた。時間が少し余ったので魯迅公園のお墓にも詣でたが、その公園には真っ白い鳩がたくさん放たれていて、子供たちが餌を与えている光景は中国では始めてみるものだった。ガイドの人の話では白い鳩は肉が硬くてまずいということだった。昔、中国の人は鳩を見ればそれが伝書鳩であろうとよく食べていたからである。すでに上海の人民広場などでも白い鳩の群れが新名所になりつつあるそうであるが、将来は中国のあちこちでこの様な光景が見かけられることになるだろう。

仕事の都合や健康上の理由から、常連の東田副会長、武田御夫妻の参加がなくて残念だったが、始めにも書いたように、今回の旅は私の予想していたよりもはるかに成功したものになったと自画自賛している。参加された団員の方がたはどのような感想をおもちだろうか？最後に、協力くださった団員のみなさま、松田社長、佐々木さん、この旅の企画に縁のしたの力持ちの役割を果たしてくださった校友会事務局の方がたにあつくお礼を申し上げる。